

2024 年 2 月 27 日

2023 年度

聖路加国際大学大学院看護学研究科

課題研究

脳卒中後遺症がある生活者の
「折り合いをつける」様相の探究
—文献検討—

Exploring the Aspects of "Coming to Terms" for
People Living with Stroke Aftereffects: A Literature Review

22MN022

長谷川 和美

要旨

【目的】本研究では、脳卒中後遺症がある生活者の「折り合いをつける」の様相を文献検討から明らかにし、脳卒中後遺症がある生活者のニューロサイエンス看護高度実践看護師としての看護実践の示唆を考察することを目的とした。

【方法】研究デザインは文献検討。対象文献ならびに図書から、「折り合いをつける」様相と推測される文脈をデータとして抽出した。分析方法は、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に「折り合いをつける」の対象と感情に焦点を当て、データを収集しカテゴリー化をした。生成されたカテゴリーをもとに「折り合いをつける」様相を構造化した。

【結果】対象文献数は、研究文献 45 件と図書 5 冊であった。脳卒中後遺症がある生活者の「折り合いをつける」様相と推測されるデータを計 203 抽出した。後遺症によって変化した

【コントロールできない気になる症状】、【後遺症によって思い通りにできない動作】、【実感する身体機能の状態】、【後遺症によって変化した生活】、【過去と乖離する自己像】、【病気をしても自己が存在すること】、【他者や社会との変化した関係性】の体験が契機となり、それらが「折り合いをつける」対象そのものとなっていた。同時に【経験がない状況への動揺】、【病気や世話を受けることへの憎悪】、【直面する思い通りにいかない状況への不快感】、【発病前と異なる自己を体感して悲しむ】、このような不快な感情のなかでも【回復した実感や生活できていることへの喜び】の感情が折り合いをつける際に生じていた。対象に生じる感情と向き合い、〈今とこれからの状況に思考を巡らす〉ことで、〈主体的な姿勢を取り戻す〉や〈現状を体感して前向きになれない〉という変容が捉えられた。

【考察および結論】脳卒中後遺症がある生活者の「折り合いをつける」様相とは、後遺症によって変化した対象に生じる感情と向き合い、主体的な自分らしさを取り戻すための過程であると考えた。加えて、「折り合いをつける」様相を捉えることは、後遺症を体験していない看護師が、脳卒中後遺症がある生活者の世界を理解するための助けになると考えられた。ニューロサイエンス看護高度実践看護師として、脳卒中後遺症がある生活者とのパートナーシップの中で、感情を尊重し対話を行う直接実践が必要である。さらに脳卒中生活者の「折り合いをつける」様相を一般看護師に理解してもらえよう教育的な役割が必要である。